無名詩人「三田循司」

横田英司

刃も凍る北海の　御楯と立ちて　二千余士

S先生十八番「アッツ島血戦勇士顕彰国民歌」の歌い出だしである。国民学校三、四年生の頃よく歌ったものだと、先生から聞いたことがある。昭和十八年五月、米国領アリューシャン列島アッツ、キスカ両島に侵出していた日本軍は圧倒的兵力と物量を誇る米軍の反攻を受け、アッツ島守備隊は同月二十九日、指揮官山崎保代大佐以下二千六百余の戦死をもって玉砕。一方キスカ島は七月二十九日、濃霧にまぎれた撤収作戦が成功。全員が無事に脱出することが出来た。

このアッツ島戦死者の一人に三田循司がいる。三田は大正六年岩手県稗貫郡花巻町（現花巻市）に生まれ、旧制岩手中学から旧制第二高校、さらに東京帝国大学文学部へ進学した。大戦突入の昭和十六年十二月、繰上げ卒業。翌年の二月応召、盛岡の歩兵第百五連隊に入隊する。

二高時代には戸石泰一等と「芥」を発行し、また同校尚志会雑誌「尚志」に投稿するなど詩文の才を磨いている。大学期には戸石と共に先輩の太宰治をしばしば訪ね、また太宰の紹介により山岸外史の知遇を得て、文学的交流をはかった。

今年（平成二十一年）は太宰治の生誕百年に当り、各地で記念行事が行われている。岩手県北上市にある「日本現代詩歌文学館」でも「太宰治生誕１００年三田循司資料特別公開記念展」が開かれた。この展示会に先立つ六月中旬、同窓生である三田に関する別件の取材をしていたＡ氏（筆者の二級先輩）が、偶然にも三田の親族を捜し当て、これによって未公開の資料が多数発掘される。その資料の中には太宰から三田へ宛てた葉書五通と彼の実弟悊への一通もある。太宰は三田の戦死を惜しみ、著作「散華」に「三田循司」の実名で登場させている。

御元気ですか。
遠い空から御伺いします。
無事、任地に着きました。
大いなる文學のために、
死んで下さい。
自分も死にます、
この戦争のために。

（三田から太宰宛の書簡）

「散華」にはこのフレーズが三度も出てくる。さらに太宰は、私に「死んで下さい」とためらわず自然に言ってくれたのは、三田君ひとりである。なかなか言えない言葉である。

こんなに自然な調子で、それをいへるとは、三田君もついに一流の詩人の資格を得たと思った。

（太宰治著「散華」旺文社刊より）

また戸石泰一も後年「玉砕」を発表し、三田の死を悼んでいる。

三田循司は、一九四三年五月、アッツ島に於いて戦死した。彼は、私の一級上、仙台の高等学校で知り合ったのである。あの頃、私達はよく「純粋」という言葉を口にし、それが凡てを律する規範であつたのだが、わたしにとって、三田は、「純粋」の同義語（シノニム）のような男であつた。

（戸石泰一著「玉砕」の書出し）

三田が二十六歳の短い生涯の中で残した詩は多くはないが、今回発見された太宰からのはがきには、「夕暮」と「高架」がよいと記されている。その一つ「高架」を挙げると：

高　架

ああ満天星空大いなるかな
闇の底に
人々の世界は一列に灯をともし
點滴された涙の如くちらばひ歩む人の姿よ
大都會の屋蓋を抜く高架の橋に
大都會の晦冥を縫ふ道程の一顛に立ちて
鬱屈するむらぎもの精氣を喀けば
ああその聲の嚴しさよその眞摯さよ
闇々虚空に鍛へられて光を發し
厲しき精神を散華せり
友を送りてこの高架の橋去りがたく
人間愛心の美しさに涙呑まんとす
星のふる夜
人の絶えたる路上

（芥発行所「芥」第3号より）

太宰は「文学でも人間でも、『素朴な感動』を忘れてはいけません。前記二作には『素朴な感動』の芽があります」と評し

ている。

三田の詩自体は難しい語句を配しながら、ものごとへ真摯に向き合う姿勢が窺がえる気がする。二高、東大の青春期が日中戦から太平洋戦へと戦火が拡大し、世情混沌、個人としての苦悩が増す中にあっても、彼本来の誠実さが貫かれる。さらに彼の遺品の中に三冊の手帳がある。これは入営中の三田から弟の悊へ、訪ねる度手渡されたもので、日付けと共に短い詩が綴られている。戦後仙台の「明窓社」から「展」二号に抜粋の形で掲載された。

以下はその中の二編である。

消灯　二月五日

星空が新しい
闇が懐かしい
闇の底に小さく横たはつて
初めて胸がひろがる
開かれた世界の星の
ひかりと風のなつかしさ
言葉がほしい
言葉がほしい

言葉を失つてゆく

十月二十日

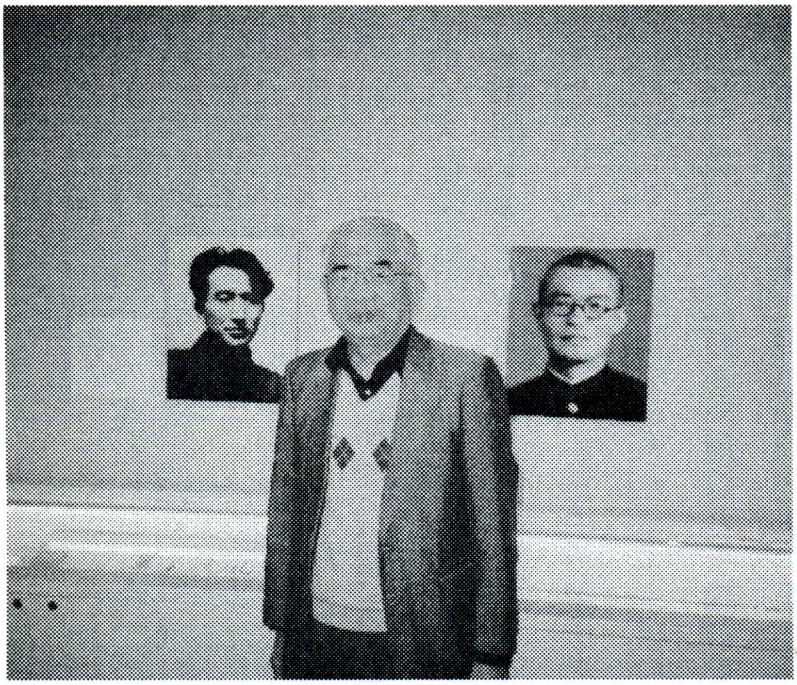
俺の詩精神は
まさしく人間のむれを離れてゆくのか
一つの空圏へ
そして次の道は戦場である

戦後、評論家山岸外史、作家太宰治、弟三田悊らによって三田循司遺稿集「北極星」の発刊が企画されたが、今日まで実現されずに到っている。だが、三田循司没後十七回忌の昭和三十四年、花巻の広隆寺に山岸外史揮毫の石碑が建てられた。碑銘には三田の詩「北極星」が刻まれている。

出陣の夜である
雪まじりの風は

くろい三本煙突に
うなつてゐる
星は消えた

太宰治生誕百年記念の時に、期を同じうして現れた三田の遺品・メッセージの数々。前出のA氏もその奇縁におどろく。青春の一時期、一瞬の光芒を放ちながら消え入った無名の詩人「三田循司」。もしも彼が命数を長らえたならばの仮構は、大方の思いであっても、もはや叶わぬ夢である。魂鎮めの願いを籠めて蕪詩一首を捧げたい。



太宰治生誕100年「三田循司資料特別公開記念」展示場にて、2009.10.12
壁面の写真右が東京帝大生の三田と左が太宰（岩手県北上市・日本現代詩歌文学館）

憶三田循司氏　　三田循司氏を憶（おも）う
三徳兼該文藻豊　　三徳兼該（さんとくけんがい）　文藻豊かなり
丈夫玉砕熱田叢　　丈夫は玉砕す　熱田の叢（くさむら）
至誠循理詩言志　　至誠理に循（した）がい　詩をもて志を言う
司命知兄百世功　　司命（しめい）は知る兄（けい）が百世の功を

平成巳丑季秋　横田英司賦

［大意］　三田循司氏は、三徳兼ね備わり才藻に富み、将来を嘱望されていた。惜しむらくは、玉砕の島アッツに斃れた。誠実で道理にしたがう氏の生き方や志は詩によって充分に表わされた。人の寿命を決めるという神は、氏に長命こそ与えなかったが、きっと後世に残る功績を知っていたのであろう。

［語釈］　**三徳**　知・仁・勇。
兼該　兼ね備える。
循理　道理にしたがうこと。
司命　人の寿命をつかさどる神。